

2022年3月11日発行

# テキスタイルの新たな視点を求めて

牛 尾 卓 巳

相模女子大学紀要 VOL.85 (2021年度)

# テキスタイルの新たな視点を求めて

牛 尾 卓 巳

## In Search of a New Perspective on Textiles

Takumi USHIO

**Abstract** : From August 3rd to 15th, 2021, The Fiber Art by the Fifteen exhibition was held at the Museum of Kyoto. Three of my works were displayed in this exhibition. In this paper, I will be giving an overview of the exhibition, the concept of the works on display, as well as my approach to visualizing images with materials and techniques.

**Key Words** : textile, fiber, art, wool

### 1 はじめに

京都文化博物館5階ギャラリーにてテキスタイルの造形表現を集めた「ファイバーアートの15人」展が2021年8月3日から8月15日の日程で開催された。企画・運営に当たる実行委員の代表は、京都を拠点に活動されているテキスタイル作家で、同時に長年教育に携わりこの分野を牽引してこられた久保田繁雄・大阪成蹊大学名誉教授である。本展は、2018年5月に同館で開催された「7人のファイバーアート」展の第二回展に当たる。前回は久保田氏のほか、いずれもこの分野を支えてこられた7名で構成されていた。今回はこのメンバーに、新たに選出された中堅作家8名が加わり、計15名で開催された。私も新たに加わった参加者として、織り技法による作品を3点出品した。

私のほかに、出居麻美、伊藤藍、梅田祐子、大手裕子、草間喆雄、久保田繁雄、佐久間美智子、鈴木純子、田中孝明、椿操、中川裕孝、中野恵美子、野田睦美、林塔子（50音順、敬称略）が今回の展覧会

に参加した。

新型コロナウイルス感染拡大に伴う非常事態宣言の度に延期を余儀なくされ、開催時期としては決して万全とは言えなかったが、それでも会期中には約1000人の来場者を集めた。

会場には1人3～6点の大型の作品がゆとりをもって展示され、国内のこの分野の展覧会でもなかなか見ることのできない、見応えのある内容になったと感じている。(図1-1、1-2、1-3)

### 2 繊維による表現

展覧会のタイトルとなっている「ファイバーアート」は、ファイバーワークやテキスタイルアートとも呼ばれる。直訳すると「繊維による造形」であり、その言葉のとおり繊維素材を主体とした造形表現である。この繊維による表現の可能性を追求した取り組みは1960年代から世界各地で行われている。そのきっかけとなったのが、1962年から1995年までスイス・ローザンヌで開催された国際タペストリービエ

ンナーレである。ヨーロッパには古くから石造りの壁面に、絵画の代わりとして綴れ織による織物を飾るタペストリーの文化がある。緯糸を経糸が見えないほどに打ち込み、絵画的な織物に仕上げる綴れ織によるタペストリーは、装飾的な意味はもちろんだが、保温効果や防音効果にも優れているため、生活の中で広く使用されていた。ローザンヌのビエンナーレには当初、このような綴れ織（ゴブラン織）による織物という出品条件があり、オーソドックスなタペストリーが並んだ。しかし、回を追うごとに平面であったタペストリーは次第にレリーフ状になり、そして彫刻的な立体作品へと表現形態の幅が広がった。3回目からは当初の条件は取り払われ、繊維素材による自由な造形表現の場となった。それはタペストリーの枠に収まらず、上記の「ファイバーク」や「テキスタイルアート」と呼ばれるようになり、世界的なムーブメントとして新しい表現が次々と生まれ、現在まで多くの作品が発表されてきた。<sup>1</sup>

### 3 線の構成要素

テキスタイルを構成する最小単位である繊維は、



図1-1：会場となった京都文化博物館

The flyer is titled 'ファイバートの15人' (Fiber Art by Fifteen) and lists the following artists and their works:

- 伊藤 聖 Aiko Ito
- 出原 典美 Hemi Idei
- 牛尾 金巴 Yukumi Kubo
- 梅田 裕子 Yoko Umeda
- 大寺 裕子 Hiroko Ohtera
- 草野 麗雄 Tatsuo Kusano
- 久保田 菜穂 Shigeo Kubota
- 佐久間 美智子 Michiko Sakuma
- 鈴木 純子 Junko Suzuki
- 田中 幸明 Takaki Tanaka
- 榎 美奈 Misae Enoki
- 中川 陽菜 Hironaka Nakagawa
- 中野 恵美子 Emiko Nakano
- 野田 純美 Mutsumi Noda
- 坪塚 裕子 Yoko Hiratsuka

Exhibition details: 2021年8月3日(火) - 8月15日(日), 10:00-18:00, 京都文化博物館5Fギャラリー.

図1-2：展覧会のフライヤー（デザイン：西出元）



図1-3：会場風景（撮影：西村浩一）

大きく天然繊維と化学繊維に分けられる。天然繊維は主に綿・麻などの植物繊維と絹・羊毛などの動物繊維に、化学繊維は主にポリエステル・ナイロンなどの合成繊維、レーヨンなどの再生繊維に分類される。染色や加工が容易なこともあり天然繊維が用いられることが多い。これらの他にもステンレス線や銅線といった金属類もしばしば用いられる。このように様々な繊維が今回のようなテキスタイル表現の材料として使用されている。

糸や繊維を造形の構成要素として捉えると「線」の要素である。繊維素材はそのまま用いる場合もあるが、多くは糸に加工してから用いる。

#### 4 線から面へ

素材によって形状・性質は異なるが、基本的には繊維を撚り合わせるにより糸はできている。その糸を織る・編む・組む・結ぶなどの方法で「面」である布にする。

糸（線）を布（面）にする方法を技術的にみると、「織り」は織機に張った経糸に緯糸を入れて組織させることにより布にする。簡単にいえば経糸と緯糸の組み合わせであるが、その構造により多様な織物が成り立っている。「編み」は糸でループを作り、そこに次のループを通すことの繰り返しにより布を

作る。「巻く」「結ぶ」ことにより面を構成していく手段として、マクラメやコイリングと呼ばれる技法がある。

繊維を糸にすることなく直接布にする方法もある。織る工程を踏まずに布にすることから不織布と呼ばれる。その代表としてウールの縮絨作用を利用したフェルトがある。また布ではないが、紙漉きも繊維から面をつくる方法のひとつである。

このような素材の性質を生かした技法に加え、染色についても浸染・捺染・防染など多彩な手法がある。

これら数多くの選択肢の中から、いかにして素材・技法・色を選び、組み合わせて「面」を作るかが布を創造する上で重要となる。

今回の出品作品においても、様々な織物の技法のほか、編み、縫い、フェルト、紙漉きがある。いずれも繊維を主な材料としているが、作家の継続的な研究の上に成り立つその表現は多種多様である。

#### 5 Shelter

私が出品した作品は「Shelter 001801」「Shelter 002001」「Shelter 002002」の3点である。大型の作品1点に中型の作品2点という構成だ（図2）。

2002年に身を守るかたちをテーマとした発表を行



図2：左から「Shelter 002001」、「Shelter 001801」、「Shelter 002002」（撮影：西村浩一）

い、その後2005年に大阪の湾岸通ギャラリー・CASOで開催された企画展「テキスタイルの未来形」で発表した作品に初めて「Shelter」というタイトルをつけた。

生物は生存のために様々な方法で自身の身を守っている。あるものは甲羅や鱗など硬く覆われた外皮によって外敵の攻撃を防ぐ。また鋭く尖った棘により接触を拒むもの、大きく突出した角などにより外敵からの攻撃に対抗するもの、身を隠すために環境に溶け込み擬態するもの、逆に敢えて目立つ色彩により毒を持っていることをアピールし捕食者を威嚇するものもある。これは永い時間の中で、環境に順応した形態や方法を持った者が生き延びた結果であり、未だ進化の過程ではあるが、現段階では最適なかたちと言える。この身を守るかたちこそが、その個の本質を表しているとは私は考える。

私たち人間は道具を作る・使うという他の生物にない方法で環境に順応してきた珍しい種である。現在も様々な道具や手段で身を守っているが、私はその中でも衣服に着目した。

## 6 身を守る被膜

先史時代の人類は、動物の皮などを身に着けることによって、気候の変化や外傷の危険から身を守ったと考えられている。そのうち植物から繊維を取り出す方法を発見し、それを撚り合わせ紐や糸にし、「組む」・「編む」を経てやがて「織る」ことにより布にする手段を見出す。植物だけでなく獣毛や繭など動物繊維からも糸が作られ布が織られた。時代を追うごとに技術が進み、細く強度のある糸により軽く快適な布が作られるようになる。また化学繊維の誕生によりその機能性は進化し、現在も日々新しい技術が研究されている。

このような布の変遷をマズローの5段階欲求のピラミッド<sup>2</sup>と照らし合わせてみると次のように考えることができる。

寒暖差や外傷などの危険から身を守る生存の欲求が満たされると、人はより安全で快適な生活を求めるようになり、衣服にも肌触りや通気性など快適さが求められるようになった。生命の維持や物理的な安全が確保されると、皆と同じ流行の服を着ることに安心感を抱くなど、社会的帰属を求めるようにな

り、これが満たされると人より良い服を身に着きたい、他人から認められたいという承認欲求に向かう。さらに布に求めていた欲求は高次の自己実現へ進み、自分を表現するツールになっていった。

現在の私たちは、衣服というかたちで布を纏うことにより気候の変化や、怪我などの外傷の危険、紫外線などの有害物質から自身の身を守っている。物理的な意味だけでなく、社会の中での役割を示す目的や自分を象徴するもの、表現するものとして社会的な意味でも機能している。私たちにとって布は自身を守る一番身近なシェルターであると言える。

## 7 表情と形状

以降では出品作品の具体的なイメージや技術的な部分に触れたい。今回はメイン作品である「Shelter 001801」について記述する。

私は布を平面のまま発表することは少ない。テキスタイルデザインという観点からすると、布は平面で完結させることが一般的であり、用途や形状は使用者にまかせることも多い。私はデザインする布の

イメージをその形状が持つ固有のものにしたい。要するに表情（表層）と形状が一体となったテキスタイルをデザインしたいのである。これは造形の基本であると同時に理想形であると考えている。

今回の作品の形状は日本の伝統からインスピレーションを得た。日本の伝統衣装である着物を纏ったような竹まい、大きく円弧を描いた扇型。この外形に、中心から放射状に広がる縫い絞りを表す襷と、鹿の子絞りのような細かい皺のテクスチュアを与える。

絞り染は世界各地で古くから存在するため日本特有のものではないが、種類の豊富さでは日本は突出しており、世界に誇れる伝統的な染色技法である。その代表ともいえるのが有松・鳴海絞りで、100種類以上の絞りの技法を有する。その技は現在も様々な衣料やインテリアなどに生かされている。

その繊細で多様な絞りの表情と着物を思わせるフォルムを一体とし今回のデザインとした。同時に扇を広げたようなフォルムにも和の要素を溶け込ませ、中心から放射状に広がる色彩と陰影により、エネルギーを発する力強さを表した。(図3-1、3-2)



図3-1：「Shelter 001801」の形状



図3-2:「Shelter 001801」の表情

## 8 素材と技術

イメージを具現化するためには素材と技法を知る必要がある。テキスタイル領域においては様々な素材に加え、工芸的な染織技法から最新技術まで幅広い可能性が存在する。

私はウールの縮絨を利用したテキスタイル表現を研究テーマとし、継続的にその成果を発表している。以前の研究では、綿の生地とウールの生地を縫い合わせることで一体としていた<sup>3</sup>が、この構造を糸から「織る」ことにより再現できないかと考え、二重織による研究を始めた。

二重織とは表・裏の二重の生地を同時に織る織物の技術で、経糸または緯糸のある部分のみを表裏の織物にまたがって接結させたものである。一重の織物を織りながらもう一方の織物とつなぎ合わせていき一枚の布にする。表裏異なる素材・デザインの布が織れる、軽量で厚地にできる、表裏の隙間に別の要素を入れることができるなどデザインする上でも多くの長所がある。この二重織の性質を生かし、表に綿糸、裏にウール糸を使用した織物を考案した。

ウールは衣類や居住空間のテキスタイルや工業用

品など幅広く使用されている素材であり、造形表現の材料としても優れた性質を持っている。ウールは水分を含ませ圧力を加えると繊維同士が絡み合い縮絨する性質を持っている。この縮絨作用を生かしたフェルトは広く親しまれており、多様な造形表現を可能にする。

二重織により織り上がった生地を、洗剤を溶いた水で洗う。ウールは縮絨により縮むが一方の綿糸は縮まない。この収縮率の差により生地に複雑な皺のテクスチャが生じる。

糸を染め、織り機にかけ、糸と糸を構造的に組織させる「織る」という行為によって一本の糸から布を生み出し、ウールの縮絨によってその布に性格を与える。経糸と緯糸の関係の中でウール、綿などの繊維素材が一体となりイメージした表層を作り上げる。

空気を孕み周りの空間と一体になる布の有機的な造形は、他の素材にない独特の存在感を表現することができる。

## 9 円弧織

今回の作品の大きな特徴は扇形のフォルムである。作品の中心から放射状に広がる色彩と陰影を実現するために特殊な製織方法を用いた。

一般的に織物は織機に張った経糸に対し直角に交わるように緯糸を入れて製織していく。そのため織り上がった布は図4のように四角形になる。これを円弧状に織るために図5のように緯糸を縦織の要領で織り返し、ある一定の角度をつけておいて、織り進んだ(A)の部分が(A')の位置になるまで経糸を巻き取る。これを繰り返すことにより、徐々に円弧状の布が織り上がる。

今回の製織方法は図6のように内側(ア)と外側(イ)では必要な経糸の長さが異なる。通常は全て同じ長さである経糸を、それぞれの長さで織機にかけ、さらに製織の際には長さの異なる経糸の張力を一定に保ち続ける必要がある。これらを解決するため、独自に考案した仕掛けを用いた。

巻き取る回数を最低限にするため、緯糸を自由な角度で打ち込めるように箆にも工夫を凝らした。通常は緯糸が歪まず入るように経糸に対し直角に箆を打つことが前提である。そのため支点は固定されて一定の動きしかできないようになっている。これをフリーにし、自由な角度で打ち込めるようにした。

## 10 空間を演出するテキスタイル

テキスタイルの作品形態は平面・立体・半立体などがあり、設置方法により伝わるイメージも変わる。同じ平面であっても壁面に接するように展示する方法や、壁面から少し離して展示する方法がある。前者は壁面との対比で作品が引き立つ基本的な展示である。後者は壁から離すことにより、物質としての存在感が増す効果や、壁に陰影を映し出す演出もできる。また、完全に壁から離し空間に吊るす展示方法であれば360度から作品を見せることができる。逆に鑑賞者を囲うように展示をすれば視界の360度がその布に囲まれて、その布の世界に入り込んだような演出ができる。このほかにも前後に重ねてレイヤーの効果を狙った展示や、光の透過性を生かして照明や自然光を利用した展示ができる。

立体作品の場合は空間に自立、または天井から吊って設置することが多い。もちろん壁面に展示することもある。また、空間全体を作品として体感してもらおうインスタレーションもよく用いられる。こ

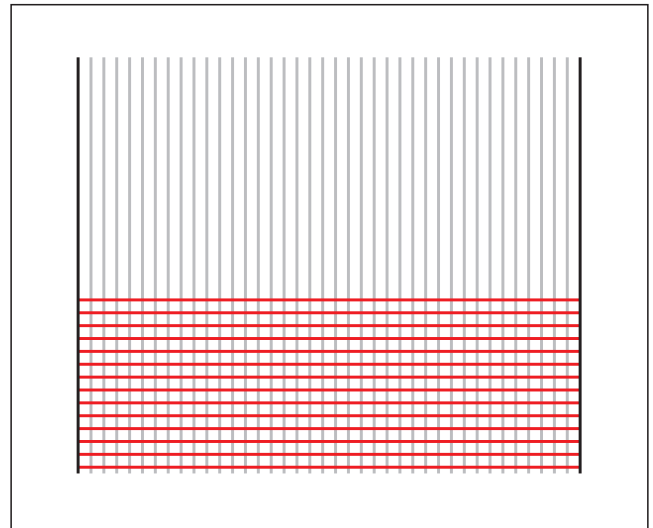


図4

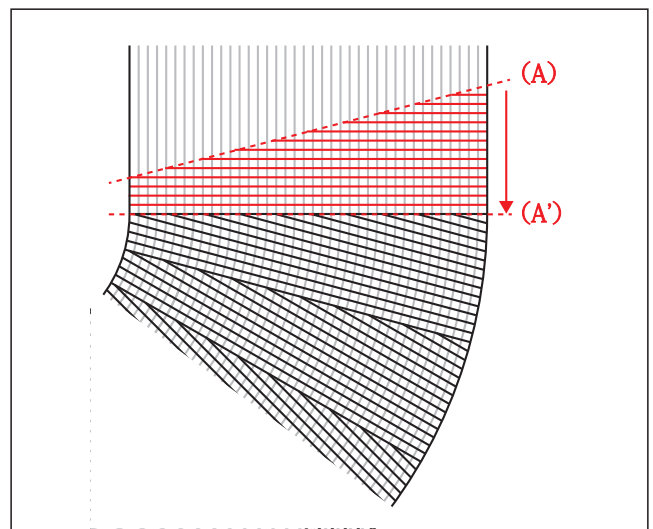


図5

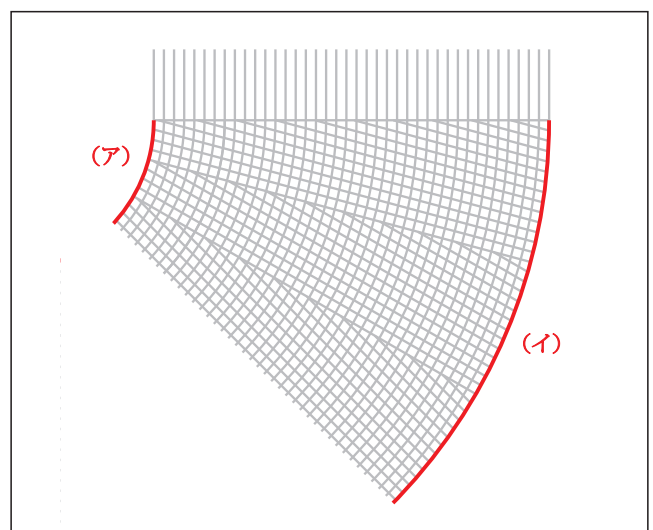


図6



の展示方法の豊富さはテキスタイルの持つ大きな特徴の一つである。

今回の私の作品は自立による展示であると同時に、空間を使ったインスタレーションでもあり、配置によって伝わるイメージは大きく変わる。

本展での私の展示スペースは、会場に入っすぐの場所で、約8m×4.5mの床面積であった。このスペースにどのように配置するかを検討した。展示する空間の広さや色、照明なども作品の印象に大きく関わる。

展示計画として三つの案を用意した。一つは一番大きな「Shelter 001801」(1)を前面に配置し、その後方に「Shelter 002001」(2)、「Shelter 002002」(3)の2点が控えるという案である(図7-1)。これは会場入口から入って目の前に大きな作品が現れることで、来場者に強い印象を与えることができる。二つ目は大きな作品を中央に配置し、前後を小作品で挟む案(図7-2)。そして三つ目は大きな作品を最背面に配置し、残りの2点を手前に配置する案である(図7-3)。これらのうち会場での仮設置を経て、入口からの構図も良く、手前の作品から一番奥の大きな作品までの空気感が感じられる三つ目の案を採用した。

## 11 同じ京都の地で

私たちの展示と同時期に京都国立近代美術館では「モダンクラフトクロニクル—京都国立近代美術館コレクションより—」が開催されていた。これは「現代国際陶芸展」、「現代ガラスの美—ヨーロッパと日本—」など、1970年代に同館で開かれた展覧会を当時の作品とともに振り返りながら、近代工芸の展開を紹介する企画であった。<sup>4</sup>

その中で「今日の造形〈織〉—ヨーロッパと日本—」を振り返る作品として、ポーランドのマグダレーナ・アバカノヴィッチや、日本の小名木陽一、熊井恭子、小林正和、堀内紀子(敬称略)などによる当時のファイバーアートのコレクションが展示されていた。同展の企画趣旨には以下のようにある。

「織り」の造形は、今きわめて活発な動向を示し、美術の分野に確固とした位置を築きつつある。それは、従来の織物とは形も内容も異なる新しい造形で、いわゆる工芸とかクラフトの枠を越えて、絵画や彫刻と肩を並べるものとして自己を主張しているのである。

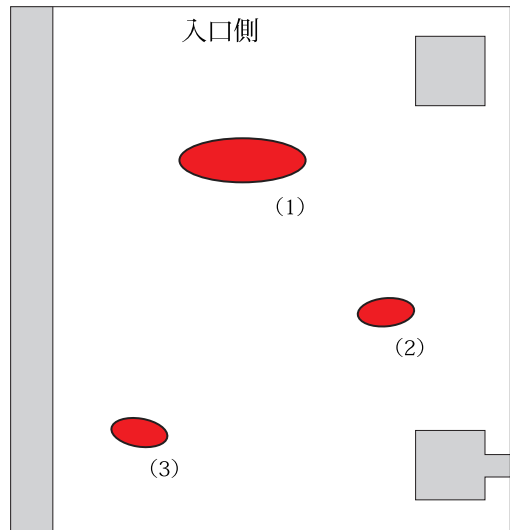


図7-1: メインの作品を前面に配置する案

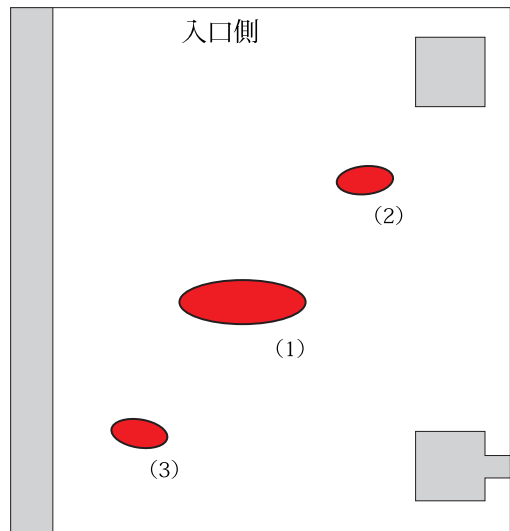


図7-2: メインの作品を中央に配置する案

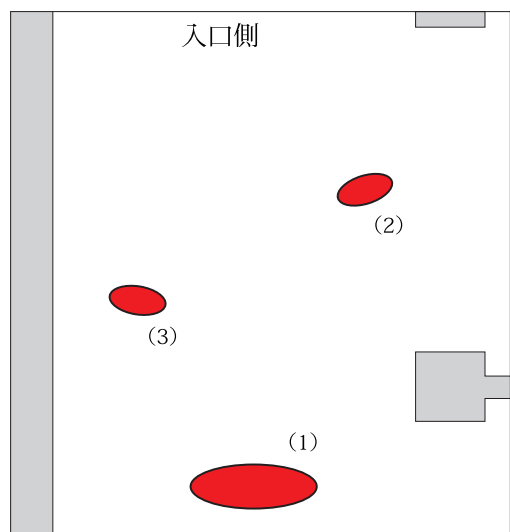


図7-3: メインの作品を最背面に配置する案  
手前の作品から一番奥の大きな作品までの空気感が感じられるこの案を採用した。

こうした動きは、今世紀前期のドイツのバウハウス運動、さらにフランスのリュルサらによるタピストリー復興運動等によって導き出されたのである。これが近年のローザンヌの国際タピストリー・ビエンナーレなどに顕著に見られる、三次元的な作品に代表される新傾向の出現により華々しく開花したといつてよいであろう。<sup>5</sup>

当時の展示から46年の歳月が流れ、テキスタイルやファイバーアートを取り巻く環境も大きく変化し、国内でこのような表現が発表される機会も減った。しかし今回、同じ京都の地で当時と現代の作品が同時期に展示されたのは偶然とはいえ深い縁を感じた。

この二つ展示の関係性には触れてなかったが、京都新聞には私たちの展示に関する記事が「ファイバーアートの再覚醒へ」と題して掲載されていた。<sup>6</sup>

## 12 おわりに

現代社会において布は衣服、生活雑貨、インテリア、工業用品、その他様々な用途で使用されており、私たちが最も長い時間接する日常生活には欠かせない存在である。その反面、あまりに身近であるために布に対する価値は薄れ、粗末に扱われているのも事実である。特にアパレル業界においては、低コストで大量に衣料が生産され、余剰分が大量に廃棄されることが世界的にも大きな問題として取り上げられてきた。

しかし、最近ではSDGsへの意識の高まりや、新型コロナウイルス感染症の流行による生活様式の変化もきっかけとなってこの状況は見直され、衣料そしてその材料である布に対しての考え方が変化している。

このような動きがある中、これまでの布に対する概念を取り払い、その用途・役割や存在をあらためて見つめ直し、布の新しい価値を創出することが、私たちテキスタイルに関わる者にとっては必要であると考えている。

今回私が参加した「ファイバーアートの15人」展もその一端を担う活動であると言える。前述したとおり、このような展示は減少傾向にあるが、新たな文脈でこの先に繋げていきたい。

## 注

<sup>1,3</sup> 牛尾卓巳「テキスタイルにおける表現の多様性」相模女子大学紀要vol.83、2020年 1-2頁及び5頁

<sup>2</sup> マズローの欲求5段階説  
アメリカの心理学者アブラハム・マズロー（1908～1970）が提唱した心理学理論。人間の欲求は下から「生理的欲求」「安全の欲求」「社会的欲求」「承認欲求」「自己実現の欲求」の5段階のピラミッドのように構成されており、下層の欲求が満たされると、その上の層の欲求を満たそうとする。晩年にはさらに5段階の上の階層である第6の層「自己超越の欲求」を提唱したとされる。本稿では5段階に当てはめて記述したが、すべてに当てはまる訳ではないことを書き添えておく。

<sup>4</sup> 京都国立近代美術館／展覧会／モダンクラフトクロニクル ―京都国立近代美術館コレクションより―  
<https://www.momak.go.jp/Japanese/exhibition/Archive/2021/442.html>  
(2021年10月20日)

<sup>5</sup> 京都国立近代美術館／展覧会／今日の造形<織>―ヨーロッパと日本―  
1975年9月29日～11月14日に開催。  
チェコスロヴァキア、ポーランド、ユーゴスラヴィア、デンマーク、フィンランド、ノルウェー、スウェーデン、フランス、ドイツ、オランダ、スペイン、スイスの12カ国と日本における織物による造形表現に焦点が当てられた。  
<https://www.momak.go.jp/Japanese/exhibition/Archive/1976/116.html>  
(2021年10月20日)

<sup>6</sup> 前芝直介「ファイバーアート再覚醒へ」京都新聞、2021年8月7日